

株式会社ディーバ



株式会社ディーバ

〔本 社〕 東京都港区港南二丁目15-2
品川インターシティB棟13階

〔創 立〕 1997年（平成9年）5月26日

〔従業員数〕 連結：257名
（2012年6月30日時点）

〔U R L〕 <http://www.diva.co.jp/>



ディーバ
情報システム室
マネージャー
山口慎二氏

システム連携でトラブル発生！ 重すぎるバッチ処理への対応策

ディーバは、複雑化する企業の連結会計システムのパッケージ開発やソリューション提供を手がける企業だ。同社は従来から手がけていた制度会計分野に加えて、管理会計分野にも進出。まずは、社内適用を目的に、複数のシステムから経営に直結する情報を収集するシステムを構築した。しかし、情報量の増大と収集サイクルの短期化により、バッチ処理のトラブルが頻発するようになる。事態を打開するために選択した方法とは何だったのか。ディーバ 情報システム室 山口慎二氏に話を聞いた。

■複数のシステムから情報を集約するWindowsバッチが限界に

1997年設立のディーバは、国内の連結会計パッケージで圧倒的な実績を誇る企業である。主力製品の「DivaSystem」は、日本の時価総額上位100社のうち、約半数の企業グループに導入されている。公認会計士などの専門知識・スキルを持つ人材も豊富に抱え、たんなるシステム構築にとどまらないソリューションを提供することで、多くの企業の信頼を得ている。

さらにここ数年は、事業の幅を広げるべく管理会計の分野にも注力。関連子会社3社を新たに設立し、さらなる飛躍への準備を着々とすすめている。管理会計分野に進出するにあたっては、まずは社内の管理会計システムを整備していくことが重要と考え、2010年の初頭から構築プロジェクトをスタートした。プロジェクトの中心メンバーである情報システム室 山口慎二氏は、次のように説明する。

「これまでも管理会計はさまざまな方法で実施していました。ただ、工数情報や人事情報などは個別のシステムやファイルに存在している状態でした。そこで、経営に関わるさまざまな情報をDivaSystemに集約する取り組みを始めたのです。まずは、システム間連携として、Windowsバッチを用いて情報を集約する仕組みを構築しました。」（山口氏）

スタート当初は、単純に売上と費用を出すレベルだったので、それで十分だった。ところが、集約する情報の種類・量が増え、かつ経営サイドから週次でのレポートが求められるようになると、徐々に問題が顕在化していった。

「弊社はCRMとして、マイクロソフトのDynamics CRMを利用しており、そのデータベースや人事情報はSQL Server上にあります。一方でDivaSystemはオラクルのデータベースを使用しています。こうした異なるシステムからWindowsバッチで情報を集約すると、処理が複雑になります。このため、処理のタイミングを間違えるとデータの取得に失敗し、その調査とデータ復旧に余計な工数が必要になるという問題が発生するようになったのです。」（山口氏）

このため同社では、各システムからDivaSystemにデータを集約できる自動処理ツールの導入を検討。処理の自動化によりデータ集約のミスを防ぎ、無駄な工数・コストの削減を目指すことになった。

■手軽なシステム構築とエージェントレスで手間のかからない Senju Operation Conductorを選択

ツールの選定にあたって、まずは5製品をピックアップ。金額や機能を比較して2製品に絞り込み、最終的には野村総合研究所（以下、NRI）のSenju Operation Conductor（以下、Senju/OC）が選定された。

選定のポイントについて、山口氏は次のように説明する。

「最も重視したのは、いかに簡単に作り込めるかでした。弊社のIT部門は、グループ全体で約400名の社員を数名で見えています。このため、複雑なツールを入れても、そこに工数を割く余裕はありません。他のシステムを管理しながらの作業になるため、できるだけ簡単に構築できる必要があったのです。その点、Senju/OCはインターフェースが見やすく、研修制度もしっかりしていました。また、エージェントレスで監視やジョブ実行を行えるので手間もかかりません。担当者の中に前職でSenjuを使ったことのある経験者があり、そのときの評価も選定の決め手になりました。」(山口氏)

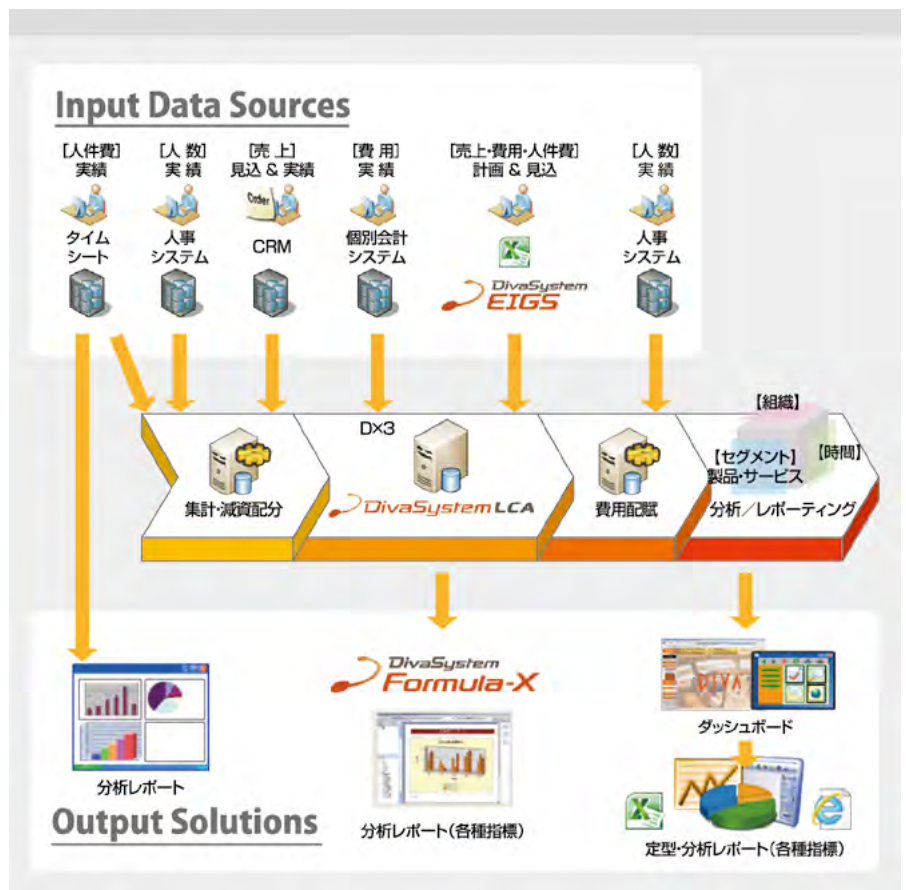
Senju/OCが選定されたのは2011年の中旬。それから約半年をかけて構築が行われた。「Senju/OCの導入にあたって、6台あったサーバを3台にまとめました。複数台のサーバでWindowsパッチを動かしていたのも問題だと考えたからです。また、Senju/OCをそのまま使っても処理が止まるケースがあったので、エラー処理の組み方を再検討するなど、さまざまな追加・変更を行いました。選定から約半年後の2012年の初頭頃には安定稼働するようになりました。」(山口氏)

■トラブルがゼロになり、より付加価値の高い業務が可能に

Senju/OCの導入効果は明らかだった。具体的には、以前は週に1回は発生していたWindowsパッチのトラブルがなくなり、調査やデータ復旧の工数が完全に削減された。また、Senju/OCの導入に合わせてIT部門の体制も少数精鋭へと大きく変更され、より付加価値の高い業務のウェイトが高くなった。「2012年10月からは新しい人事システムと、日報システムが導入されましたが、従来3人月近く必要としていたものが、今では私が1人でシステム対応を行っています。Senju/OCによる自動処理が実現できなければ、こうした新しいシステムの導入も困難だったと思います。」(山口氏)

なお、この新しい人事システムと日報システムにもSenju/OCによる自動処理が適用され、管理会計に必要な情報がDivaSystemに集約される予定だという。

また、将来的には、DivaSystemの顧客企業に対して、Senju/OCのような自動実行の仕組



▲ディーバの管理会計システム

みを提供する可能性もあるという。山口氏は、その将来イメージを次のように説明する。「DivaSystemは自動処理の仕組みを搭載しており、夜間パッチに組み込んで処理する場合がありますが、他のシステムとの連携やバックアップ処理もあって、全体のパッチ処理が停止する可能性がゼロではないのです。しかし、DivaSystemはその性格上、止まることの許されないシステムです。特に決算期のトラブルはあってはなりません。したがって、Senju/OCのような自動実行ツールを導入することでトラブル防止に役立てることは、十分に意味のあることだと考えています。」(山口氏)

■管理会計の社内適用を実現し、今後のビジネス展開にも貢献

連結会計パッケージを中心に、管理会計や制度会計、経営情報活用ツールなど、ビジネス領

域を着々と拡大しているディーバにとって、Senju/OCは管理会計の社内適用を大きく前進させるツールとなった。そこで得られたノウハウ・経験は、自社の管理会計の推進はもちろん、今後の管理会計ビジネスの展開にも貢献することが期待されている。

「お客さまのビジネスを総合的に理解し、お客さまの事業環境も含めて把握したうえでご提案していかなければ、こちらの思いばかりを押しつける結果になりかねません。そのためには今回の管理会計プロジェクトが果たした役割は大きかったと思います。将来的にはSenjuをお客さまのシステム監視にも役立てていきたいと考えています。」(山口氏)

管理会計システムの社内適用を進めるうえで、欠かせなかったSenju/OC。IT担当者の新たな価値創出を後押ししたSenju/OCは、今後もディーバのビジネスの成長とともに、なくてはならないものとして活用されていくことになりそうだ。